

奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民投句  
令和三年一月度 入選句（投稿総数千九百十二句・一般投句数五百五十四句）

特選

選者 度会 さち子

閉店の一行の修羅 十二月 東京都世田谷区 関戸 信治

このコロナ禍で閉店に追い込まれていく店が多い。閉店という張り紙の裏には、決めるまでに言い尽くせないほどの多くの葛藤があったはずだ。いまだコロナの終わりがみえない。その先もどうなるやら。「一行の修羅」がすべてをいいあらわしている。見事。

伊吹山雪の匂いの風届く 大垣市 井沢 美志津

いよいよ伊吹山も白くなるのだらう。風に雪の匂いを感じたという。芭蕉が「折々に伊吹をみては冬ごもり」と詠んだように、雪の伊吹山は私たちの暮らしの風景のなかにいつももある。刺すような伊吹風ともしばらく付き合わねばならない。

冬耕の起こす一鍬土の息 三重県四日市市 後藤 允孝

ひと鍬ごとに掘り起こす畑。それは次の命を育てるため。息をはずませながらのひと鍬。それに応えるような掘り上げたつややかな土。その土も息しているとらえた耕す人のいとおしむ気持ち、よろこびも伝わる。土の息は命をはぐくむものが交わす息でもある。

秀逸

年越の港震はす汽笛かな 神奈川県横浜市 龍野 ひろし

なにごとともなかつたように初夕日 京都府宇治市 古根 洋子

米を研ぐ水の硬さや寒に入る 大垣市 新町 恵子

冬の虹削られし山ひと跨ぎ 大垣市 佐竹 余史美

焼芋を湯気ごとかじる星の夜 海津市 横井 美圭

年の瀬や返却本の斜め読み 大垣市 早筈 千恵子

後拝は冬夕焼けの惜しみなく 大垣市 佐藤 すみ子

神域を統べる古木や大旦 大垣市 後藤 喜美男

源氏物語時雨に硯研ぐ 静岡県富士市 磯野 昭仁

噓して言いたき言葉見失う 埼玉県さいたま市 短夜 の月

入選

競を待つ小牛の背に細雪	不破郡垂井町	西田 厚堂
七草や囃し言葉を刻み込む	福井県敦賀市	山田 美千代
沈む日を背に短日の帰港船	神奈川県横浜	龍野 ひろし
冬帝の欠伸しそうな日となりぬ	大垣市	高津 喜久子
伊吹嶺と空の少しを冬夕焼	大垣市	福田 木綿子
消印に雪の滲みや夕かげり	大垣市	臼井 秀子
是といふ特技を持たず枇杷の花	不破郡垂井町	高木 初枝
万歩計いつもの場所で鴨数ふ	大垣市	北浦 典子
羽搏きに朝の光を散らす鴨	養老郡養老町	田中 紫香
水琴窟音の尖りて雪降り来	大垣市	高田 雅章

入選

寒柝を了ひて体あたたか	大垣市	小林 研
はやぶさや師走の夜空かけぬける	大垣市	米山 春江
年の瀬の空へ奏でるマーチかな	大垣市	香田 末代
蒲団からどんと出す足寝言の子	大垣市	多賀 英華
若水に茶筌の泡の香しく	大垣市	坪井 克枝
干大根自在にしなひ夕日浴ぶ	大垣市	鶴田 信子
肩掛は余り毛糸や劉生忌	大垣市	山田 賀子
冬の朝空気は綺羅と大垣城	大垣市	大杉 すみゑ
すれ違ふ漁夫に仄かな焚火の香	三重県四日市市	後藤 允孝
山茶花のがやがや咲いてしづかなり	長野県下伊那郡	長沼 まさし

選者吟

海鳴りの能登にかたむく寒北斗

さち子